

自閉症のこころの問題にせまる

最近印象に残った体験から

ある事例検討会に出席して

先日、ある大学の事例検討会でコメントターを依頼されたので出席した。心理相談員が母親面接を、若手のセラピスト（Th）が子ども（A男、五歳男児）を担当していた。報告は子どもとThとの遊びの内容を中心に行われた。

初回面接で明らかになった事例の概要は、以下のようなものであった。

未熟児で出生。乳児期、よく泣き、なかなか寝ない、いつもびりびりして寝てもすぐに目を覚ます、そんな敏感な子だった。そのため、母親はこの子を育てるのに大変苦労していた。親子関係も最初からずつとしくりこないままで、そんな状態が今日まで続いている。

た。数年後に転居した時も、A男はかなり不安な反応を示していた。排泄の自立は早かったが、まもなくおしっこをもらすようになった。さまざまな相談機関を渡り歩き、可能な限りの指導や訓練を受けてきた。ある医療機関では「治らない」とまで言われたこともあったらしい。

これまでの経過から母親はA男の問題として、視線回避傾向、コミュニケーションの苦しさ、手先の不器用さ、集中力の困難、興味の幅が狭いことなどを取り上げていた。

相談員は母親の悩みを聞いて、次のような方針を立てていた。この子の苦手なところをはつきりさせながら、地道に取り組んでいきましよう。どう診断するかは棚上げにしたまま、子どもの苦手なところに着目しているところから、相談員はA男に何らかの発達障害を疑っていたのであろう（おそらく通常、

高機能広汎性発達障害と診断される事例であろうが）。

気になった母親のせりふ

初回面接の内容を聞いて、筆者が気になったのは、母親の次のようなせりふだった。「これまでこの子に対してなんとなくしつくりこない違和感のようなものを抱き続けていた」こと、「これまでいろいろな治療や訓練を受けてきたが、どれもこの子のある一面しか捉えてもらえず、この子全体を見てくれなかった」ことが不満で不安でもあったというのである。この母親の語った内容は、非常に深く重い意味をもっていると感じられたのだが、相談員はその点についてまったく触れていなかった。

相談員がA男を診る際に何に着目したか、そのことに筆者は昨今の発達障害臨床の現状

の一端を垣間見る思いだった。

個体能力階層としての発達障害

こんにち発達障害は、子ども個人の内部にある中枢神経系の成熟過程の遅れや障害（基礎障害）を想定し、その基礎障害が個人の能力面に現れたものとされ、その表に現れた障害の特性によって多様な発達障害に分類されている。このように発達障害を概念規定していけば、ある子どもを目の前にした時、どのような障害（発達の遅れや歪み）があるかを診ていこうとするのは、ある意味では至極当然の姿勢であるかもしれない。今や発達障害は個人に閉ざされた「個体能力の障害」であるとの共通理解が浸透している。よって冒頭で紹介した相談員の姿勢は、今日の一般的な傾向を示したものだと思われ、受け止めてよいだろう。

先に述べた相談員の見立てに基づき、担当したThは、A男といかにして楽しく遊べるようにするかにころを砕き、遊びの流れがわからない時にはわかりやすくA男に提示しながら、遊びが円滑に進むように努力していることが経過報告の中でよく伝わってくる内容であった。どんな遊びがA男との間で展開したか、微に入り細にわたってその内容が報告され、A男とのことばを介したコミュニケーションの様子もわかった。

母親がA男に対して抱き続けた違和感

しかし、筆者がこの事例（母子関係）で着目したのは、先に述べた母親の訴えである「この子に対してなんとなくしっくりこない違和感」が母子関係のどのような内実を示しているかということであった。その手がかりとなる情報は初診時の面接内容に散りばめられていた。

繰り返すまでもなく、生育歴の内容そのものである。その底辺に流れているもののひとつは、母子間になんともいえない緊張が今日までずっと続いてきたのではないかということである。このことを考慮することなく、A男の生育歴を読み解くことは困難ではないのか。このようなことを考えながら以後数回の面接内容を聞くと、予想した通りA男と母親とのコミュニケーションの様相が生々しく浮かび上がってきた。

ある印象的なエピソード

その中でも印象的であったのは、次のようなエピソードである。

A男は玩具の車を走らせながらThと表向きは楽しそうに遊んでいた。そんななかで、A男の手に血がついていることにThは気づいて、思わず「どうしたの？」と尋ねた。A男は指摘された血を見てもまったく驚きもしないし、平然としていたが、そばで相談員と面

接していた母親がそれを聞くと、すぐにA男のそばに近づき、A男の手を見るなり、「どうしたの!？」と驚くほど大きな声でまるで責めるような口調で子どもに尋ねた。A男はそんな母親の反応に対してその場で突然固まってしまい、そばの椅子の上にとんと座り込んでしまったという。

A男はThの指摘で自分の血を見ただけではまったく驚きもしなかったにもかかわらず、自分の手に付いていた血を見た母親の反応に圧倒されて、固まってしまっているのだ。

関係欲求をめぐるアンビバレンス

経過報告全体を聞くなかで確かなものとなつていったのは、A男が母親に非常に頼っていること、しかし、母親（のみならず周囲の人たち）に対して強い緊張を抱き、容易には気持ちを外に押し出せないことであった。ここに関係欲求をめぐるアンビバレンスを読み取ることはさほど無理なことではないだろう。このことが先のエピソードに端的に示されていると思われるのである。

自分の周りで何が起きているのか、状況を判断する能力はまだまだ育っていないかもしれないが、常に不安な気持ちに圧倒されながら過ごしているA男である。頼りにしている母親の予想もつかないような驚きと不安な反応に、A男の気持ちは文字通り伝染するよう

に反応してしまっている。誰にも頼れず、かといって逃げることもできない、そんな心的状態がA男の「固まる」反応にうかがわれるのである。

子どもは全存在を通して

自分の気持ちを表に現わしている

このように子どもたちは自分の気持ちのありようを、全存在を通してわれわれに示している。このようなエピソードにこそ、母子の日頃の関係のありようが端的に示されているのであって、A男のこのころの動きを理解するうえできわめて重要なものであるはずだが、残念ながらそのことに相談員もThもほとんど着目していない。その理由の一端は、相談員自身の臨床能力の問題というよりも、先に指摘したような今日の発達障理解にあるといえるのではないかと思われるのである。それは何かといえ、能力障碍の一面にのみ着目し、彼らの気持ち(こころ)の動きにほとんど重きを置いていないところである。彼らはことが理解できないから、状況把握ができないから、不器用だからなどといった理由で、われわれとかかわり合うことが困難だと本当に言えるのであろうか。

母子コミュニケーションの問題

たしかに先の事例で母親が直接訴えていた

のは、「ことばでのやりとりがうまくいかない」という話しことばの次元でのコミュニケーションの問題ではあった。

しかし、ここに認められた母子コミュニケーションの問題は、子どもの言語発達能力の問題だと矮小化して捉えることはできない。当の母親もその点についてなんとなくは感じ取っているであろう。だから「しつくりこない違和感」を訴え、そのことに対して、これまでどこでも取り上げてもらえなかったことから、「この子のある一面しか捉えてもらえず、この子全体を見てくれなかった」との感想をもっているのではないか。

コミュニケーションに生まれやすいずれ

原初段階でのコミュニケーション

コミュニケーションの問題を発達の観点から捉えなおした時、話しことばや身振りなどを介したコミュニケーションが可能になる以前に、すでに子どもと養育者の間には深いところで繋がりが合い、かつ互いに影響し合っている、そのような性質のコミュニケーション世界が脈々と息づいている。筆者がこれまで情動的コミュニケーション、あるいは原初的コミュニケーションと称してきた世界である。コミュニケーションの原初段階での形

態である。

この本能的ともいってよい情動水準のつながりは、当事者自身もその実体を通常は意識化することはできない。人と人の関係は、こうした意識の介在しないところで影響を及ぼし合いながら展開しているものであって、けっして話しことばなどの意識的な行動のみで動いているわけではない。先の母子の印象的なエピソードに示された母子相互の反応は、まさしくこの水準の反応を示している。

原初的知覚の特徴

原初段階でのコミュニケーションの特徴は、その知覚様態に端的に示されている。これまで筆者が指摘してきた原初的知覚である。具体的には相貌的知覚や力動感といわれてきたものである。この原初的知覚は、われわれが通常五感と称している知覚特性とはまったく性質を異にするものであることは改めて強調しておく必要がある。なぜかといえば、これまで常套句のように指摘されてきた自閉症の障特性との違いを明確にしたいがためである。

自閉症の障特性とされてきたもの

従来、自閉症の障特性としてよく指摘されてきたのは、聴覚認知は劣るが、視覚認知は優れているということである。この知見は

客観的評価法によって幾度となく確認されてきたため、説得力をもって多くの者に支持され、このような障害特性を活用した療育指導を目にすることも少なくない。

知覚機能の分化と未分化

しかし、筆者がここで問題としたいのは、発達の観点に立った時、知覚の問題をどう考えればよいかということである。

われわれ人間の知覚機能としてよく知られている特性は、視聴覚機能の遠位覚のみが高度に分化し、その反面、嗅覚、触覚、味覚などの近位覚の諸機能は著しく退化していることである。このような機能分化の特性は、人間が社会で生活していくために不可欠なものである。われわれのコミュニケーション世界ではシンボル機能を有することばをはじめとしたさまざまな媒体を通して、見たり聞いたり読んだりすることでコミュニケーションが成り立ち、その世界（これを筆者はこれまで象徴的コミュニケーションと称してきた）にわれわれは大きく依存している。したがって、このような知覚機能の分化が生じているのは必然的なことである。

しかし、このような機能分化が生誕後すぐに起こっているわけではない。乳幼児期早期の知覚様態として活発に働いているのがいまだこのように分化されていない知覚様態、す

なわち原初段階の未分化な知覚である。このような知覚が優勢なコミュニケーション世界がどのような性質をもつか、そのことを理解することが、コミュニケーションのずれがなぜ起こりやすいかを考えていくうえで、きわめて重要な意味をもつ。

では、原初的コミュニケーション世界とそこで重要な役割を担っている知覚と情動は、どのような特徴をもつのであろうか。

原初的コミュニケーションとは どのような世界か

音叉のごく共振する

情動の働きとして重要なことは、第一に、他者のそれと共振するという性質を有することである。それはちょうど並べ立てたふたつの同じ振動数の音叉の片方を振動させると、他方の音叉も自然に共振するという性質と似通ったものといわれている¹⁾。乳幼児期の（子ども・養育者）関係において情動調律（affect attunement）互いの情動が良好に響き合っていること²⁾とか情緒応答性（emotional availability）³⁾子どもの気持ちの動きに適切に呼応していること⁴⁾が強調されるのはそのためである。

子どもと養育者の気持ちを通じ合う関係の成立は、このように情動が共振するという性

質をもつがゆえに可能になる。もしこの情動が親子の間で容易に共振しない状態にあれば、両者間での気持ちを通い合う関係は成立しがたい。

共振を困難にする要因

ではどのような状態にあると、共振が困難となるのか。一方の音叉を振動させても、他方の音叉に手を触れていけば、その音叉は振動しない。音叉が何にも触れることなく解放された状態にあつてこそ本来の振動が可能になる。それと同じように、われわれがなんらかの観念に囚われていたならば、情動も心地よく響かなくなる。何か気になつたり、周囲の目をひどく気にしたり、不安が強くなれば、情動は子どものそれと気持ちよく共鳴しない。子どもとかかわり合う際に、われわれの気持ちも解放されていることが何より大切になる。ウイニコット⁵⁾が指摘した「育児への没頭」と相通する心的状態である。

〈知覚・運動・情動〉過程

第二に、情動の働きは単独で機能しているのではないということである。身体を動かす運動機能、何かを感じ取る知覚機能など、人間の諸機能と不可分に繋がりが合つて働いている。身体を動かせば、必ずから情動も揺さぶられるし、同時に知覚のありようも変容する。

たとえば、身体が心地よく揺さぶられれば、情動は快の興奮状態を呈し、その時の外界知覚は好奇心が掻き立てられるほどに快の様相を示す。しかし、不安（な情動状態）で孤立した状況に置かれたならば、身体は凍りついて固まり、外界からの刺激も恐ろしい形相で迫ってくる。

このように、原初段階では、情動、運動、知覚などの諸機能は不可分に未分節な形で、共時的に働いている。〈知覚・情動・運動〉過程と称してきたのはそのためであって、けっして知覚機能のみ抽出すれば済むというものではない。

情動の変化を鋭く捉える原初的知覚

ついで重要なことは、情動の変化が鋭く知覚されていることである。このような知覚を可能にしているのが原初的知覚である。その代表的なものが力動感 (vitality affects) ともいわれてきたものである。この原初的知覚の特徴は、聴覚刺激、視覚刺激、触覚刺激、味覚刺激、嗅覚刺激など、われわれには一見すると五感に分化した知覚刺激であるように思われても、各々の刺激のもつリズム、強弱、大小といった動きの変化を敏感に感じ取っているということである。あらゆる刺激の底に流れている共通した特徴を捉えているところにこの原初的知覚の最大の特徴がある。

このことによつて、ややもすると分化してそこに共通性がないかのように見える種々の知覚刺激を統合することが可能になっていく。「黄色い声」「甘い香り」「とげとげしい言い方」などの表現に端的に示されているように、一見すると異なる知覚刺激であるようにみえても、そこに共通の動き（力動感）を知覚できるがゆえの体験様式である。

〈自己〉融合的世界

原初的コミュニケーションの世界は、このように情動が共振する世界であるため、そこでの体験は〈主体〉と〈客体〉、〈自己〉と〈他者〉というように分節化されることなく、一体となつて同時に生起するという特徴をもつ。そのため、われわれから見ると、他人である誰かがそばで不穏な状態になると、その不穏な情動は容易に共振してしまい、不穏な状態が〈他者〉のみの体験ではなくなり、〈自己〉の体験であるかのように共振れしてしまう。このような〈自己〉融合的世界にあるため、自閉症の人々では〈他者〉の不安が容易に取り込まれてしまい、みずからも混乱状態に陥りやすいのである。

これまでこの原初的知覚の特性はほとんど取り上げられることもなく、理解もされてこなかったように思う。それはなぜかといえ

ば、その最大の弊害となつてきたのが、久しく言われ続けてきた自閉症の障害特性とされてきたものである。発達的観点の重要性を強調するゆえんである。

コミュニケーションのずれはなぜ生まれるか

知覚機能とコミュニケーションのずれ

このような定型発達の乳幼児期早期の子どもたちと同じように、筆者は自閉症の人々は原初的コミュニケーション世界、すなわち原初的知覚状態がいつまでも非常に優位に働いている世界に生きてるように考えている。しかし、先に述べたように、われわれは視聴覚優位なコミュニケーション世界に強く依存しながら日々の生活を営んでいる。ここにこそ、自閉症の人々とわれわれとの間に、コミュニケーションのずれやゆがみが生じやすい危険性を、見て取ることが必要だと思われるのである。

ことばのもつ字義と力動感

わかりやすい例をひとつ取り上げてみよう。われわれはことばで語りかけて自閉症の子どもたちに何かを指示しようとする。その時、われわれは伝えたいことをことばで表現しているつもりである。しかし、ことばでい

くら語りかけても通じないことは少なくない。すると、われわれは彼らがことばを理解できないからだとして即断してしまいがちである。

しかし、筆者からみると、語りかけることばの語調があまりにも強く侵入的なために、それに反応して回避的態度を示しているのではないかと思われる場合が少なくない。われわれは話しことばが理解できない、通じないと捉えているが、子どもの視点に立てば、ことばの語調、つまりはことば（のみならず对人的構えそのものも）のもつ力動感があまりに侵入的であるがために、その不快な刺激に反応していると考えられる。ここでは、われわれは象徴的コミュニケーションの世界で彼らとの関係を捉えているが、子どもの視点に立てば、情動的コミュニケーション世界での反応として捉えることができるのである。

コミュニケーションの土台づくり

土台が育つてその上に上部が組み立てられていくという本来の発達の動きが、何らかの理由によって阻害されたものが発達障害であるとするならば、当然、その土台づくりに立ち返って育てなおすというのが本来の発達支援のあり方である。そのことを踏まえるならば、コミュニケーションの問題も、発達の観点から情動的コミュニケーションの水準に立

ち返ることが何より大切なことになる。したがって、われわれも情動的コミュニケーションの世界で、子どもたちがどのような動きを示しているのか、感じ取っていく努力を惜しんではならないはずである。

他者のこのころの動きを感じ取ること

ここでわれわれが「感じ取る」ことを可能にしてくれているのが原初的知覚そのものである。他者のこのころ（気持ち、情動）の動きは、みずからの存在を通してしか捉えることができないということである。これまでわれわれが「関係発達臨床」とことさら「関係」を強調してきたのは、そのような理由によるのであって、けつして客観的に対人関係の特徴を捉えることの重要性を主張しているのではない。そもそも人間は、本来、このように深いところで繋がりがあっている存在であるからである。

では彼らのこのころの動きを感じ取るためには、具体的にどのような現象に着目したらよいのであろうか。

自閉症の子どもたちのこのころの動きをつかむ

M-U (Mother-Infant Unit) の事例からひとつわかりやすい事例を取り上げてみよう。

う。これは最近小書⁽³⁾で自閉症と誤診された虐待事例として取り上げたE男（三歳〇カ月）である。あるセッションでE男の相手をしてきた学生がつぎのような報告をした。

第四回のエピソード

Th（学生）がE男の身体に触れようとする、急に興奮状態になる。そしてE男は口先ではThに対して「イヤ、イヤ」と言いながらも、ThがE男の手を握っていた手を離そうとすると、自分から握り返してくるなど、身体はThと接触することを好み、自分からは離れようとはしない。……そのためThはE男の気持ちを図りかねて、どのように相手をして良いか困惑してしまった。

それに比べて、母親はE男とは正反対で、口では相手に対して気遣い、好意的な態度を取っているが、身体の構えはE男に対して拒否的な反応をとっていることがうかがわれる。E男も母に対して顔ではにこにこしているが、身体は拒否しているのである。

母子ともに認められる強いアンビバレンス

E男とThのかかわり合いのなかで、E男自身に関係欲求をめぐるアンビバレンスが端的に認められているが、それと同時に母親にもE男に対して強いアンビバレンスを認めることができよう。

さらに重要なことは、E男がThに対して身体では積極的な関係を求めていることが示されているのとは対照的に、母親はE男に対してことばのうえではかかわらねばと述べているにもかかわらず、身体はE男の接近を拒否していることである。E男と母親ではアンビバレンスの構造が異なっていることがわかる。すなわち、意識水準ではE男は相手(Th)に対して拒否的な態度を取っているが、情動水準では肯定的な態度を取っているのに比して、母親の場合はその逆の構造をとっているということである。

しかし、結果的には、このようなアンビバレンスの強い両者のかかわり合いが負の循環をもたらし、関係障害は増幅の一途を辿っていくことになる。

身体と身体を通じて感じるこころの動き

情動的コミュニケーションの世界は、単に情動と情動が響き合うのみならず、同時に身体と身体も響き合う関係にある。その意味で、先の報告で学生がみずからの身体で感じ取ったE男の身体の動きは、子どもこのころの動きを如実に反映していることが実感としてよくわかる内容である。まさに「知覚・情動・運動」過程の特徴そのものがよく示されている好例である。

このような子どもこのころの動きを糸口

に、支援の手だてを考えていくことが非常に重要だと思われるのである。関係発達支援と称するゆえんでもある。

「コミュニケーションのすれはどのように発展するか」

このように母子ともにアンビバレンスの強い状態であれば、両者のコミュニケーションの場では、深刻なすれが起こる。その具体的な例を示す典型的なエピソードを、先と同じ学生の報告から取り上げてみよう。

第五回のエピソード

ブロックの山の上に登って、一つひとつのブロックを手にとっては移動して積み上げる。その時、一つひとつのブロックをいろいろなお友だちに見立てて遊んでいる様子がかがわれる。Thも一緒に入って遊ぼうとするが、E男はThに呼応するようなことはほとんどなく、自分の世界を思い描きながらひとりでどんどん話し続けている。そんなE男を少し離れたところから見ている母親は、ときおりE男に年齢や名前を尋ねて、Thの前で答えさせようとする。それが遊びの流れとはまったく関係なく、唐突な声かけであるので、E男は母の問いかけをまったく言っていないほど無視するようにして、ひとり遊びを続けている。そうしたなかで、次のような場面が

あった。

E男がブロックを使って空想上のお友だちとままごと遊びをしている。それに熱中して一人で誰かに盛んに語りかけているふうである。そこにお友だちの名前が盛んに登場してくる。そんななかで母は唐突にE男に向かって「先生(Th)にお名前教えてください、って言ってごらん」とE男に要求するのだ。

最初、E男はまったく無視して遊び続けた。母親はむきになってさらに強い調子で「先生のお名前、聞くのよ」、「先生のお名前なあに、って聞くのよ」などと重ねて要求する。すると、E男は「先生、学校、一、二、十」と一見意味不明なことを発する。それを聞いた母親は、「自分の名前を聞かれると、数字を言うんです」と説明している。たしかにE男は母親の要求には直接応えていない。母親のE男への要求に対して、唐突な要求であったことも手伝って、初めのうちはThも黙って応じないでいたが、あまりにも母親のE男への要求が執拗なので、ついにThの方からE男に代わって「〇〇××です(自分の名前)」と答えたのである。

このエピソードにみられる母親のE男に対するその場に不釣り合いで唐突な行動を誘発している大きな動因となっているのは、E男のこころの動きというよりも、ひとつには、

母親自身のところを強く支配している世間体、すなわち自分が他者にどのようなみられているか、といった他者の目である。そして、自分が子どもから無視されることに対する強い(見捨てられ)不安である。

このような母親からの唐突な働きかけがE男にとって耐えがたいほど侵入的なものになっていることは容易に想像できる。そのため、E男はなんとか無視したり回避したりして自分を守ろうとしているが、母親の働きかけによる影響から逃避することは容易なことではない。時には自分の意識状態が変容すること(解離反応)もあるが、多くの場合、母親のことばがE男のところに強く入り込み、結果としてそれを取り込まざるをえなくなる。独語、空笑、解離、作為体験など、のちのち深刻な精神病理現象が生まれていく素地が、こんなところに窺われるのである。

このように、母子のかかわり合いの中で、最初のボタンのかけ違いは次々に関係の難しさをもたらし、雪だるま式に関係障害は肥大化していくことになるのである。

むしろに代えて

こことはどのようなようにして育まれていくものなのか。乳児を目の前にして養育者は乳児をこころある存在として接し、そのこころに

語りかけている。そこで繰り広げられる養育者による成り込みと映し返しが、乳児にとってみずからの姿を映し出す鏡となっていく。このように、こころは「関係」を通して初めて育まれていくものである。そこで子どもと養育者を繋いでいるのが原初的コミュニケーションの世界である。このことは、たとえ自閉症と呼ばれている子どもたちであっても同様である。

そこでわれわれには、原初的コミュニケーションの世界で彼らのこころと響き合うかわりをどのようにして作っていくか、このことがまずは求められる。良好な情動調律を基盤にもちながら、子どもの体験世界を養育者は文化的に意味づけていく役割を担っている。この課題はけっして容易な作業ではないが、地道な働きかけによってそれに向かう道を切り拓くことは可能ではないか。多少なりとも筆者らはその手ごたえを感じ取っている。

(追記)

後半の事例を筆者は自閉症とは診断しないが、筆者の立場は発達障害(に限らない)がすべて関係の問題(関係障害)として捉える立場にある。よって自閉症と診断されるか否かにかかわらず、乳幼児期の対人関係の問題をもつ事例を本稿で取り上げた。このことによつて従来いわれてきた発達障害であろう

と、虐待事例であろうと同様の視点から理解していくことが可能になると筆者は考えている。

最後に、後半の事例のエピソードについては、当時MIUに参加していた畠山和子女史(当時、東海大学健康科学部社会福祉学科)に負うところが大きい。ここに感謝の意を表す。

(文献)

- (1) 廣松渉、増山眞緒子「共同主観の現象学」世界書院、一九八六年
- (2) 小林隆児「原初的コミュニケーションからみた自閉症のことば」「こころの臨床ア・ラ・カルト」二三巻三号、二七七一―二八二頁、二〇〇四年
- (3) 小林隆児「よくわかる自閉症―「関係発達」からのアプローチ」法研、二〇〇八年
- (4) 小林隆児「子どもは全存在を通して自分の気持ちを表に現わしている」「精神療法」三四巻四号、四八八―四八九頁、二〇〇八年
- (5) 小林隆児「自閉症とこころのそだち―親と子の関係発達支援」岩崎学術出版社、印刷中
- (6) 小林隆児、原田理歩「自閉症とこころの臨床―行動の「障害」から行動による「表現」へ」岩崎学術出版社、二〇〇八年
- (7) Winnicott, D.W.: *The maturational processes and the facilitating environment*. International Universities Press, New York, 1966. (牛島定信訳「情緒発達と精神分析理論」岩崎学術出版社、一九七七年)

(こ)ばやし・りゅうじ/児童精神科医